

I. イラク国民議会選挙－結果と今後－

吉岡 明子 (中東研究センター 主任研究員)

4月30日、イラクでは国民議会選挙が4年ぶりに実施され、約9000人が328議席を争った。イラク戦争後4回目の議会選挙となり、イラクにおいて権力を得るには選挙で勝利すること、そして議会の過半数の支持を得ることが必須だということが共通認識となっている。4年前と比較して、治安が悪化傾向にあることもあり、イラクの一体性やナショナリズムを強調する言辞が後退したことは、今回の選挙の特徴であった。

選挙の投票率は全国平均で61.8%となり、これは前回の選挙とほぼ同じ水準である。軍事作戦が継続中で選挙の実施が危ぶまれていたアンバール県でも40%を超え、極端に低い結果になることは免れたことから、選挙の正統性は確保されたと判断される。治安状況のために開所できなかった投票所は、全国約5.6万カ所のうち、411カ所に留まった。

5月19日に発表された暫定選挙結果によると、マーリキ首相率いる法治国家連合が95議席を獲得して第一党となった。2位以下の政党(及び政党連合)の獲得議席数はいずれも40議席以下で、その点では圧勝と言える。今回の選挙にはマーリキ首相の三選がかかっており、法治国家連合にとってはマーリキ首相の信任投票という側面があった。首相は、軍事作戦を自ら主導し、とりわけシーア派住民に対しては、自分たちのために戦ってくれる強い司令官であるというイメージを広めると同時に、政府の復興プロジェクトを選挙キャンペーンに利用してその実績を強調した。その結果、個人得票数では72万票と全国でトップの記録を残した。

ただし、バグダードと南部9県における法治国家連合全体の得票率を4年前と比較すると、40.8%から38.2%へと漸減している。圧勝の背景には、他の政党連合が、より小規模な政党連合(ないし個別の政党)へと細分化して出馬していたため、票が分散したという要素が大きい。ここで興味深い点は、シーア派やクルドについては、この政党連合の細分化がトータルとしての議席の低下につながらなかったという点である。2010年にシーア派のINA(イラク国民連合)の議席は70議席だったが、今回、旧INAの主要4党の獲得議席を合計すると76議席に増えている。同様の傾向はクルドにも当てはまる。しかし、スンナ派や宗派横断型の政党の合計議席は大きく低下し、中部の各県でシーア派やクルドの政党に票を奪われる結果になった。これは、スンナ派住民の間で治安状況やマーリキ首相の政権運営への不満が投票率に響いたこと、十分な選挙キャンペーンが行えずに有権者の支持が主要政党に収斂し得なかったことなどが背景にあるのではないかと考えられる。

法治国家連合が圧勝したとはいえ、その議席はおよそ3割に過ぎず、組閣には連立が不可欠である。可能性としては、①マーリキ首相が続投する、②マーリキ三選

を阻止したい各党の意向を受けて、法治国家連合から別の人物が首相に就任する、③反マーリキで各党が結集して他のシーア派政党から首相が選出される、といったケースが考えられる。いずれにせよ、連立交渉には長い時間がかかることが予想される。